

精神分析的ジェンダー論入門

フロイトから現代へ

北村婦美著

金剛出版、四六判240頁、3,520円、2025年6月刊

(豊田分析プラクシス) 豊田園子

精神分析はジェンダーをどうとらえてきたのか。本書はその変遷と現在地について明確に指し示してくれるものであり、多くの示唆を与えてくれる。

ジェンダー、すなわち男性か女性かという問題は、そのステレオタイプの檻からの解放を求めている、主に女性の側からのフェミニズムの運動として広がってきたところがある。ともすれば社会的、政治的な関心を引き起こしたそれは、徐々に個人に立ち返り、より内的、心理的な側面に目が向かうようになってきた。

著者はジェンダーの問題が精神分析ではどのように捉えられてきたかについて、三つの段階があったとしている。

まず第一段階はフロイトに始まる、「男根一元論」的な「ワンセックス・モデル」である。

すなわち女性は男性では「ない」という特徴だけに規定される。主体は男性であり、女性は男性になり得ない欠損を嘆く（ペニス羨望）ことしかできない。その結果、フロイトにも迷いはあったようだが、以前からの「男性＝能動的」「女性＝受動的」という見方が踏襲された。

次に第二段階は、「ワンセックス・モデルからツーセックス・モデルへ」とあるように、女性は男性で「ない」だけの存在ではなく、それ自身としての独自性があることに目が向けられるようになる。そこで能動的といえる母性に光が当たるが、同時にケアを含む関係性ということに女性性の本質があるとされた。しかしその結果、女性はまた「そうであらねばならない」という枠に息苦しさをを感じるようになる。男性女性それぞれの特質を大事にするというこのような二元論は、本来両性の要素を持つ人間に無理に男性、女性の特質のみを押しつけるものになりかねなかったのである。

そのような反省から、第三段階のジェンダー観を

牽引した女性たちは、男女の二元論的なジェンダー分割は「必要とされるフィクション」であるとして、より現実の中の個人に寄り添おうとした。本書では多くの文献が紹介されているが、なかでも精神分析的ジェンダー研究での到達点としてあげられたジェシカ・ベンジャミンは男性性、女性性などというものの中身があいまいであり、対をなすことではじめて機能する概念セットであるとし、純粋な男性性や女性性というのは理念上の存在に過ぎないと断じている。

また彼女は、女性の「能動的な」母性は男性を無力な幼児のままにしかねない脅威ともいえ、それに対する防衛として、男性は受け身で無力で感情を引き受けてくれるような女性を必要するのだとみている。ここで「母性」と、いわゆる受動的「女性らしさ」と見做されているものは、互いにポジ・ネガの関係にあることを示したのは大変興味深く、刺激的である。

ともあれ、こうした実体のない「女らしさ」に、それでも女性は影響されてしまうとすれば、女性が自分らしさを保つにはどうすればいいのか。著者がここで女性を「ただの『被害者』ではなく、力の磁場の中をみずから泳ぎ渡る者」(p170)として捉えようとしているのは心強い限りである。

本書が非常に臨床的な見地から書かれていることも強調したい。臨床の場で女性と出会うときに、参考になることは多く、臨床家に薦めたい一書である。